

成唯識論の

「ざりぬる」というよみ方について

門 前 正 彦

数年前、わたくしは平安時代初期の漢文訓読文にお

いて、打清の助動詞の連体形「ぬ」・「ざる」のい

れが使用されているかという問題を調べたことがある。

その当時、「國譯大藏經」中の國譯成唯識論のよみ方に

ついて一つの小さな疑問をいだいた。今、紙面に若干の

余白があるので、昔のノートから用例をひろって記して

みようと思う。

「國譯大藏經」論部第十卷に國譯成唯識論がはいつて

いるが、そのなかに次のように「ざりぬる」とよんだ例

がある。

(A) 彼の五識身寧んぞ相統せざりぬる。(卷四・208ペ)

(B) 寧んぞ此い能く多くの心を引くと許せざりぬる。

(C) 寧んぞ煩に取らざりぬる。(卷七・367ペ)

(D) 寧んぞ心い異類にして俱起すといふことを許せざりぬる。

(E) 何が故ぞ、覺の時に自の色の境の於に唯識のみと知らぬる。

ざりぬる () () () () ()

さて、右にあげた例の傍線の部分「ざりぬる」(打清

の助動詞連用形十完了の助動詞連体形)というよみ方

はいかがであらうか。わたくしが「ざりぬる」という

よみ方に疑問を持つ第一の理由は、打清の助動詞「

ざりぬる」

のよみ方に疑問を持つ第一の理由は、打清の助動詞「

「ザリ」に完了の助動詞「ぬ」が接続した例が容易に見出されないという点である。万葉・竹取・古今・源氏・更級・徒然を索引によつてみると、「ザリつ」、「ザリキ」、「ザリけり」、「ザりけむ」の例は相当あるが、「ザリ十ぬ」はただの一例もない。勿論、訓読文と和文との差異も考える必要があり、これだけで「ザリ十ぬ」が皆無であるとはいえないが、他にあまり見られない以上、これ以外のよみ方も一応考えられてよいのではなかろうか。

次に、國譯或唯識論がその訓法を何によつたのであるかを見ると、附題48ページに、

(前略)この國譯は安和元年南都興福寺の碩學眞興の加へし訓點に則れるものにして、文義の明瞭を缺くところは止むことを得ずして、私意を加へしところなきに非ず。

とあるので、移兵本ではあるが安和元年の識語があり、眞興の訓法を伝えていると思われる成唯識論(天理圖書館蔵、喜多院吳、但し「新版點本書目」886番のものとは別)を見るに、尚題の箇所は次のように加兵してある。

(A) 彼五識身寧不相續

(B) 寧不許此能引多心
 (C) 寧不頓取
 (D) 寧不許心異類俱起
 (E) 何故覺時於白色境不知唯識

以上のように、國譯或唯識論で「ザリぬる」とよんである箇所は、そのもとになつた眞興の点本ではすべて打者の「不」字にフコト兵「ぬ」(㊦)が加えてあるという事実は、前の疑問と考え合せて見るに、一つの方角を暗示しているように思われる。

さきに、わたくしは本誌第八輯に「漢文訓読史上の『尚題』打消助動詞の連体形について」という小論を発表したが、その結論のうち本稿に關係ある部分を要約すると

現在の漢文訓読文では打消の助動詞の連体形としては
 ①下に助動詞(訓読文では主として「べし」)が接続する場合、

②それ以外(連体修飾、準体言、係り結び、連体終止など)

の場合。

② いずれの場合にも「ヤ」が用いられ、「ぬ」は使用されない。しかるに平安初期の訓読文ではこの場合に「ぶ」が用いられるのは現在の訓法と同様であるが、②の場合には「ぬ」が使用されるという点で今のよみ方とは非常にことなっていた。

右のようになると思う。

したがって、この調査から考えてみると、真契の訓点に基づいた國譯成唯識論で「ヤリぬる」とよんでいる向題の箇所は、原漢文の「不」に加えられた打消の助動詞の連体形「ぬ」を表わすラオト点を、初期の訓読に無知なために打消の助動詞「ぬ」が②の場合に使われたことを知らずに、完了の助動詞の「ぬ」と誤認したものと見るべきではなからうか。この考えが正しいとすれば、前記(A)・(B)・(C)・(D)・(E)の國譯成唯識論の諸例「ヤリぬる」は打消の助動詞の連体形「ぬ」によみ改める必要があろう。やうすれば「ヤリぬる」という不自然なよみ方ではなく、普通の疑問文になるものである。伝統的な訓法を守っていた喜多

院点では、おそく安和元年（西暦968）にいたるまで、打消の助動詞の連体形に「ぬ」を用いていたと見ることでさるのである。

以上、初期の訓読が現在のものと異なっているために生じたと思われる誤訓の一例について愚見をのべてみた。諸賢の御批正を得れば幸である。